

つら

TAKUSUI
No. 660

10
October, 2011

発行 (財)兵庫県水産振興基金

兵庫の漁業人のための情報誌

兵庫の漁業を守るぞ!



「軽油引取税の
免税制度をなくすな!」

「A重油の免税・
還付措置を継続せよ!」

シュプレヒコールで結束を図る! 明石で決起集会

漁業用燃油の免税恒久化を訴える

「兵庫県漁業者決起集会」が開催される

NEWS 「摂播地区サバイバル訓練」～姫路・妻鹿漁港にて～

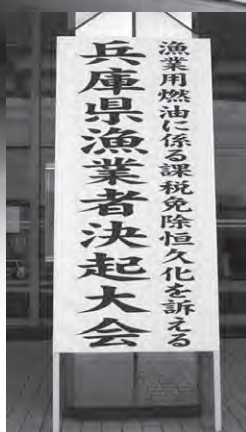
“淡路で恋活”～淡路地区漁青連が開催～

ノリ採苗作業は順調～JF兵庫漁連～

届け! 兵庫漁民の声!

漁業用燃油の課税免除恒久化を訴える

「兵庫県漁業者決起集会」開催!!



来年3月末をもって期限切れとなる漁業用燃油の免税措置の恒久化を求める集会が全国各地で開催されているなか、兵庫県でも10月12日(水)、県内漁業協同組合とJFグループ兵庫水産政策協議会、兵庫県漁協青壮年部連合会、兵庫県漁協女性部連合会の主催による決起大会が開催されました。大会当日の明石市内の会場には県内全域から続々と漁業者ら約1,700人が集結、国会議員や県・市長のほか、水産関連業者も参加した大規模集会となりました。

集会はまず、JFグループ兵庫水産政策協議会 山田 隆義会長が「燃油価格の高騰に加え、課税免除措置が無くなれば漁業者は生活ができない。恒久的な免税措置を強く要望する」と挨拶。来賓として挨拶に立った兵庫県 吉本 知之副知事は「漁業そのものが立ち行かなくなる恐れがあるもので受け入れがたい。県としても国の平成24年度の予算編成に対し、漁業用燃油の恒久的な免税措置について要望しており、今後、関係機関と連携しつつ努力してい

きたい」と述べられました。続く地元選出の国会議員や明石市長からも同措置恒久化への力強い言葉を、また、応援演説としてJF全漁連、JA兵庫中央会から激励のメッセージを頂き、会場は大きな拍手に包まれました。



意見発表に立ったJF明石浦 戎本 裕明組合長は「2008年の漁業用燃油高騰による一斉休漁した時と同じ状態が続くことになる。漁業者は漁業を辞めるといふことか!」と怒りをあらわにし、続くJF一宮町社領 弘組合長は「今でも量販店価格競争のしわ寄せを負わされており、とても負担増には耐えられない」と漁業の窮状を訴えました。大会決議はJF浜坂町 川越 一男組合長が力強く決議文(案)を朗読し、満場一致、会場の大きな拍手で採択されました。



戎本組合長 (JF明石浦)、社領組合長 (JF一宮町) が意見表明

最後に県漁青連から大角 生馬会長をはじめとする役員が壇上に上がり、参加者全員でこぶしを突き上げて「軽油引取税の免税制度を無くすな!」、「A重油の免税、還付措置を継続せよ!」、「兵庫の漁業を守るぞ!」とシュプレヒコールで力強く訴えました。

JF兵庫漁連では「免税措置廃止は軽油コストが上がったのと同じ。漁業者は負担増どころか廃業に追い込まれるケースも考えられる。今後も継続して訴えていきたい」と国民の理解浸透を図りたいとしています。



“シュプレヒコール”をリードする大角会長ら漁青連メンバー



シュプレヒコールに包まれる会場

大会決議

元来、軽油引取税は道路特定財源であり、漁業用軽油は恒久的に免税であったが、平成21年の税制改正によって一般財源化された際、臨時措置として3年間延長されたものの、平成24年3月には打ち切られることとなっている。また、農林漁業用A重油に係る石油石炭税の免税・還付の特例措置についても、同時期に期限切れを迎えようとしており、これら措置の廃止は、魚価の低迷、コストの増加にあえぐ漁業者にとって死活問題であり、とりわけ軽油引取税の負担は漁業者として、到底、納得できないものである。

漁業は、その経費に占める燃料費の割合が極めて高い産業であるため、漁業者は低速走行などの省エネルギー操業に取り組んでいるものの、昨今の燃油価格の暴騰は漁業者の努力を無にするものである。

燃油価格の暴騰に加えて、課税免除措置が廃止されれば、本県漁業が壊滅的な打撃を受けることは火を見るよりも明らかであり、これにより多くの漁業者が廃業を余儀なくされることは必至である。

については、国の水産基本法の基本理念に沿い、漁業が食料産業として、国民にとって重要な蛋白源である水産物を安定的に供給する使命を果たすことによって漁業が産業として健全に発展し、漁業の多面的機能により国土を保全していくため、漁業用燃油に対する恒久的な課税免除措置の実現に向けて、県内漁業者が一丸となって強力に運動を展開する。

以上を決議する。

平成23年10月12日

—漁業用燃油に係る課税免除恒久化を訴える—
兵庫県漁業者決起大会

NEWS

ベニズワイガニに舌鼓! ～「香住ガニまつり」が開催～

9月17日(土)、香美町香住区の香住漁港において「香住ガニまつり」が開催され、約2万人の来場者で賑わいました。このイベントは県下では香住港にだけ水揚げされるベニズワイガニを「香住ガニ」と命名し、観光協会などと連携し、平成21年から行われ今年が3回目の開催となります。



かに汁無料配布には長蛇の列が…
(この後にもまだまだ続いていました)

会場ではまず「天神破魔太鼓」の演奏があった後、カニの素人競り市やカニさばき方教室のほか、「ゆるキャラ写真撮影会」などが催されました。また、直売コーナーには香住ガニを買い求める人が大勢詰めかけ、カニ汁・ボイルガニなどの無料試食会は来場者の長い列ができ、食べた人は皆さん「美味しい!」とその味に舌鼓を打っていました。このイベントをとおして「香住ガニ」のさらなる認知度アップとともに消費拡大、観光客誘致に繋がることを期待します。



香住ガニが飛ぶように売れていました。

新舞子の干潟を残したい! ～(社)瀬戸内海環境保全協会の研修から～

(財)兵庫県水産振興基金

(社)瀬戸内海環境保全協会では、瀬戸内海の環境保全に携わる行政や漁業団体等の職員に、環境保全活動の強化・充実に係る専門知識を習得してもらおうと、瀬戸内海環境保全トレーニングプログラムを開催し、当基金からの参加者も含め約30名が9月21日(水)～22日(木)の2日間にわたり研修を行いました。

初日は広島大学名誉教授 松田 治氏の基調講演をはじめ、瀬戸内海の様々な状況について講義を受け、



翌日には、たつの市御津町の新舞子浜にて現地研修がありました。

この新舞子は1923年(大正12年)に須磨・舞子



の海水浴場に負けないものを作ろうとして、名前が付けられたもので、140haもの広さを誇るこの干潟は多くの生き物たちの生活の場となっています。

現地研修で干潟を訪れた際にも、少しの間に様々な生き物が見つかり、参加者は干潟の環境の豊かさを実感していました。

瀬戸内海においても貴重な干潟となった新舞子は現在、多くの地元住民の皆さんによって守られています。私たちの身近にある豊かな海を、再確認するとともに、いかに守っていくべきかを考えさせられる研修となりました。

命を守るライフジャケット 死亡事故ゼロへ 「摂播地区サバイバル訓練」～姫路・妻鹿漁港にて～

海上保安庁の発表によると、平成22年の船舶事故は2,400隻(うち漁船は707隻、全体の29%)、死者・行方不明者は99人(うち漁船は57人、全体の58%)となっており、安全対策は待ったなしの状況です。漁業者にとって、ライフジャケット常時着用の習慣づけや救助法等、救命に関する正しい知識・技術の獲得が急務となっています。

そこで、摂播地区漁青連並びに関係する系統団体は、8月20日のエトワール生石(洲本市由良)での開催に続き、9月17日(土)14時から、姫路市白浜町で海上安全講習会「サバイバル訓練」を実施しました。

当日は隣接するJF兵庫漁連水産加工センターにて「ライフジャケット着用の必要性」「基本的な航法と事故事例」について神戸運輸監理部・姫路海上保安部の担当者からの講義の後、会場を屋外に移し、「如何にして生き残るか」をテーマとして、青壮年部員の方々に実際にライフジャケットを着用した状態で落水する訓練を行いました。参加者は、救命胴衣の効果について再確認したようで、今後、このような活動をもって更なる海難事故防止啓発活動に努めていきたいと考えています。



当日、海に入って頂いた皆さまです



腰巻型のライフジャケットも使用しました

「1JF・1箱運動」の報告及び御礼について

東北地方太平洋沖地震JFグループ兵庫支援本部

去る5月から、東北地方太平洋沖地震の被災漁業者に対する、JFグループ間の連携支援を目的として「1JF・1箱運動」が実施されました。本県からも、会員各位からご協力頂き、多くの物資が届けられております。この度「JFグループ東北太平洋沖地震漁業・漁村災害・復興対策本部」より、これらの支援物資は、被災地の漁連を通じて、JFへ適宜お配りさせていただいているとの報告がありました。ここに皆さま方のご協力に感謝申し上げますとともに右記の通り報告させていただきます。

なお、これをもちまして本運動につきましては、ひとまず終了となります。

▽ご協力頂いた支援物資

品目	数量
ゴム手袋・軍手等	6,490双
長靴	555足
カッパ	223着
作業用ズボン	242着
その他(マスク・帽子・ヤッケ・前掛・タオル等)	500個

ノリ採苗作業は順調！ ～JF兵庫漁連で約6万反を作業～ JF兵庫漁連のり共販部

JF兵庫漁連のノリ網採苗作業は、本年度はやや遅めの9月27日(火)から始まりましたが、作業は順調に進み、淡路地区(場所:淡路のりセンター)は10月10日

(月)、播磨地区(場所:兵庫のり研究所)は10月11日(火)とほぼ予定通りの日程で終了しました。

夜明けとともに始まるノリ採苗作業は、各浜でも行われており、秋の浜の風物詩となっています。今年は両事業所あわせて約6万反の種網が誕生しました。色落ち問題など厳しいノリ業界ですが、夏以降の海況は上向いており、関係者の期待は高まっているようです。後は豊漁を願うばかりです。



兵庫県JF組合長・役職員研修会を開催 ～被災地・宮城の現状と森が海に与える影響について学ぶ～

(財)兵庫県水産振興基金

この研修会は、「広い視野を持ち、いつでも適切かつ柔軟な対応を図れるよう役職員としての知見向上とJFの健全な発展に資する」目的で当基金が毎年行っているもので、今年9月16日(金)神戸市内のホテルにて、県下各JFや漁協系統団体長、役員、幹部職員のほか、県や市の水産担当職員等123名の出席のもと開催されました。

冒頭、当基金 山田 隆義副理事長より挨拶があり、続いて「東日本大震災から6カ月～いま、宮城の海は?～」と題し、JFみやぎ 専務理事 船渡 隆平氏から講義がありました。まず本県から宮城県への支援に対する御礼を述べられた後、宮城県を中心とした被災状況や、現在の課題と今後の対策について話されました。また今、新聞等でも話題となっている「水産特区構想」についても述べられ、復興と



宮城の現状について話されるJFみやぎ 船渡専務



“森”の大切さを改めて認識(松永氏の講義)

同時に新たな問題として浮上した“特区構想”の反対運動に支援をいただきたい旨をお話いただきました。

講演Ⅱ「森が消えれば海が死ぬ～森が河川や海に果たす役割～」では、北海道大学名誉教授で現在、四日市大学特任教授の松永 勝彦氏から、北海道、三重県で起こっている“磯焼け”の現象を紹介され、森からの栄養供給のメカニズムについて詳しく話されました。どちらの講義も参加者は熱心に聴講されて、有意義な研修を行うことができました。

“淡路で恋活！”

～淡路地区漁青連が消費者交流会を開催～

JF兵庫漁連 広報部

淡路で素敵な出会いを……。『たくましい海の男たちと!! 淡路で恋活しませんか! 絶品♪ 海鮮バーベキュー@淡路島由良』と題し、9月24日(土)にエトワール生石(洲本市由良町由良)で淡路漁青連(中村高治会長)主催の消費者交流会が開催されました。

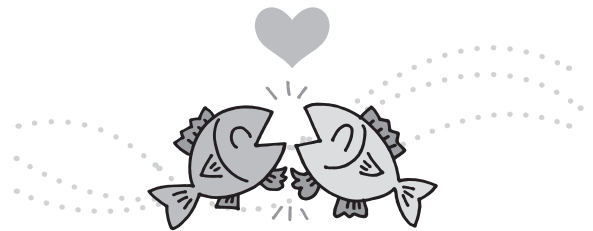
参加者は、彼女募集中の淡路青壮年部メンバー19名と、県内外より集まった女性19名。自己紹介の後、隣接の海上釣堀「海人(かいと)」で男女ペアによる釣り大会を開催しました。女性が釣竿をもち、男性がサポートに。釣り初体験の方もちらほら居るなか、たくさんの方が大きな鯛を釣りあげることができました!



挨拶に立つ中村会長



海上釣堀「海人」で釣り大会!



釣り大会の後は、おいしい海鮮バーベキューの始まりです。美味しい海の幸を味わい、盛り上がる会場。みなさん話す時間が足りないほどでした。



たくさんのカップルが誕生。「最高です！」



おいしい海鮮バーベキュー♪

そして、運命のカップリングにより・・・なんと、8組のカップルが誕生! 「最高です!」との声もいただきました。恋が実るのを祈るばかり。本当におめでとうございました!

(文: 富永)

「尼崎21世紀の森づくり構想」などを学ぶ

～瀬戸内海環境保全協会賛助会員研修会～ (財)兵庫県水産振興基金

(社)瀬戸内海環境保全協会主催の「環境問題への取り組み」をテーマにした研修会が9月7日(水)に開催され、当基金は賛助会員として参加しました。

当日、参加者34名は、まず、周辺環境に配慮された最新鋭工場「パナソニックプラズマディスプレイ尼崎工場」で説明を受け、工場内を見学をしました。

「企業は社会の公器」というパナソニック(株)創業者 松下 幸之助氏の言葉に従い、「産業の発展が地球の未来を脅かしてはいけない」との観点から同社では環境問題に取り組んでいます。“ごみゼロ100%リサイクル”を掲げた工場では、大気中のNOx削減



パナソニック(株)と阪神高速道路に挟まれたスペースにある“緑のオアシス”

のため外壁に光触媒塗装を使用したり、太陽光発電も取り入れたりしていました。続く見学時に目を引いたのは、150インチのプラズマテレビ。

その迫力と美しさに驚きました。なお、同工場では、プラズマテレビのディスプレイのみを生産しており、内部の構造はとてもシンプルなことが特徴でした。なお、見学者用に配布された靴用の防塵ネットも、見学修了時にはリサイクルのため全部回収されました。

続いて、「100年後を見据えた人と自然との共生」という壮大な構想を持った尼崎スポーツの森に移動し研修を行いました。もともと阪神工業地帯の中心地でしたが、公害問題や産業構造の変化による工場等の遊休地が発生し、地域活力が低下。そこで、国道43号線南側の1,000haという広大な地域を、森と水と人が共生する環境創造のまちに再生すべく、平成



尼崎21世紀の森構想エリア(点線内約1,000ha)

14年に兵庫県が「尼崎21世紀の森づくり構想」を策定しました。

冬にはスケートリンクにもなる屋内プールやフットサルコートなど、広い敷地に老若男女を対象にした施設がありますが、たくさんの緑の囲まれておりバッタなどの昆虫もあちこちで見られ、緑の多さからくる“安心感”を実感できました。研修当日もたくさんの子供たちが訪れており、入園者は毎年増えているそうです。また、ここでは家庭や団体等で2年育てた木を植樹するという“苗木の里親制度”を作り運営しており、里親は年々増えているとのこと。

“千里の道も一歩から”の言葉のとおり、環境保全の取り組みは地道な活動を重ねていくことが大切だと実感しました。



“里親”を待つ苗木たち(写真提供: (社)瀬戸内海環境保全協会)

「丹波篠山黒豆」が 地域団体商標に登録

JA丹波ささやまが販売する代表的な特産作物「丹波篠山黒豆」が、7月29日付けで、特許庁から地域団体商標に登録された。今回の登録は、「丹波」という地域名においても、黒大豆の商品名においても初の登録となる。

同JAでは、篠山市や篠山市商工会と「丹波ささやまブランドプロデュースチーム」を発足させ、2006年に「丹波篠山黒豆」をあわせ4品目を出願。ところが、特許庁から「認知度が低い」、「複数の団体が『丹波』という地域名を含む商標を出願していてあいまいである」との理由により、登録が認められなかった。

同JAは、広告宣伝や県外でのイベント開催など幅広くPRして認知度を高め、5年がかりで3度にわたる商標出願を続け、ようやく登録にこぎつけた。

同JAの仲井厚史代表理事組合長は、「黒大豆の老舗として、なんとか地域ブランドの証がほしかった。この取得で丹波篠山のブランドが保護できる。JAにとって、また地元にとって念願がなった喜びである。今後も全国にアピールを続け、有利販売につなげることで地域農業の活性化に取り組みたい」と話した。



地域団体商標が登録査定された「丹波篠山黒豆」

<http://ja-grp-hyogo.ja-hyoinf.jp/>

ようこそ！ 福島の子供たち ～福島っ子、神戸で笑顔と歓声～

福島原発事故は未だ収束するめどが立っていません。現在福島県民は日常生活の面で様々な不便や不安を感じ、特に子供たちには大変厳しい状況があります。ろっこう医療生協では、少しでも福島の子供たちに心身をリフレッシュしてもらおうと、夏休みの期間を利用し、福島中央市民医療生協の職員の子供たちを神戸にお呼びし、8月5日～8日まで、3泊4日の日程で23人が訪れ、神戸を満喫してもらいました。

8月5日、日到着した一行を迎えて、なだ組合員集會室で歓迎会。NHK、関西テレビ、サンテレビが取材する中、歓迎のあいさつ・神戸のまちの紹介などがあり、福島の子供たちを代表してのあいさつをいただいた後、地元の水道筋6丁目駅前商店街の方からのプレゼント贈呈や、理事による見事なマジックを披露、子供たちから歓声が上がりました。

その後一行は、4日間の日程で、王子プール・王子動物園・須磨海浜水族園・「アトリエ太陽の子」・異人館などを訪れ、被災地での窮屈な生活をひととき忘れて、久しぶりの歓声をあげて楽しみました。これらの模様は、引き続きNHKや民法各社も取材・放送するなど、地域にも発信されました。



8月7日、須磨水族園に行ったあと、午後から住吉の「アトリエ太陽の子」を訪ね、神戸の子供たちと「自画像」を描き、さらにTシャツに図柄を描き、それをプレゼントされました。



8月5日 到着した一行を迎えて、なだ組合員集會室で歓迎会のようす

<http://www.coop-hyogo-union.or.jp/>



旬に想う

写真と文
遊方子

喫茶と抹茶

◆非アルコール性の三大嗜好飲料は《茶・コーヒー・ココア》を指す。ともにカフェインや類似体の成分を持つため、覚醒や興奮作用がある。喫茶の善さは、この覚醒作用にあり、気分一新やる気を起こさせる。喫茶店は17世紀のヨーロッパに誕生、社交界で利用されて色んな文化を育んだ。日本へは明治期に伝わり、戦後は名曲喫茶・ジャズ喫茶など音楽の世界と結んで広まった。最近は抹茶を出す専門店もあり、産地から取り寄せた銘柄を、お点前で薫り高く味わえる。八十八夜の新茶は長命に繋がるという、初物好きの日本人気質を思う。

◆茶の故郷は、中国の雲南省辺りの山岳だそう。そこには樹齢400年の茶の樹が現存する。日本では佐賀県嬉野に樹齢340年以上の樹があり、静岡県藤枝の250年の古木も元気だという。気象条件や土壌管理が良ければ、かなりの長寿である。茶が日本にもたらされるのは西暦700年後期、僧最澄が中国から種子を持ち帰り、比叡山麓に蒔いたと伝えている。史書「日本後期」に嵯峨天皇に献茶した記述があり、800年代初期、既に国産茶が在ったようだ。以前、榮西禪師の事を書いた。彼も中国で修行し、帰朝時に茶の

種子を持ち帰っている。それは長崎県平戸の裏山と佐賀県の背振山に古木があるという。

◆姫の結婚式に出た帰り、菓子店が管む喫茶コーナーで抹茶を頼んだ。抹茶は茶葉を白で挽いて粉にした、漢方的な食べる茶の一種である。茶園では、摘み取る20日前に葦簾で覆って太陽光を制限、香味の優れた抹茶を作る。茶の成分のカテキン類には抗酸化と抗ガン作用があり、産地の静岡県ではガンによる死亡率が低いという。この調査資料は世界的にも評価が高い。新幹線が静岡地区の茶畑のそばを走ると、車窓に剪定された茶樹がうねうね続いて長閑な景色が見られる。兵庫県も北播磨の加東市下久米地区に茶畑があり、緑一色の整然とした美景が見られる。新茶の頃、籠を背負って茶摘みする風景も楽しめる。

◆「お茶の子さいさい・茶番劇・茶化す・茶目っ気・茶を濁す」など、言葉に茶の出るものが多い。「日常茶飯事」は普段の食事、転じて極めて平々凡々を譬えていう。また「濃目の茶は毒気の薬」という諺は、茶の解毒作用を表している。有毒キノコやトリカブトなど殆どの毒成分がアルカロイドのため、茶の持つタンニンと結合させ、不溶性にして体外へ排出して仕舞う。つまり毒消しになる。但し、増血剤に茶はタブーである。茶は生活に密着した嗜好品として、暮らしの中で当たり前前の存在になっているが、嫌がる人は稀なのではあるまいか。



大輪田塾だより

「兵庫県JF組合長・役職員研修会」受講と修了生・入塾生決定

9月の大輪田塾は9月16日(金)に行われた「平成23年度 兵庫県JF組合長・役職員研修会」を認証講座とし、同研修会の2講義を受講しました。(関連記事6頁参照)

また、9月27日(火)には大輪田塾運営委員会が行われ、第5期生について全員の課程修了認定と、入塾希望者6名の入塾が決定しました。

これにより来月には「平成23年度 大輪田塾修了式ならびに入塾式」が行われ、5期生の修了式と、7期生の入塾式が執り行われ、引き続き、当塾運営委員の田和正孝氏(関西学院大)の記念講演が行われます。

大輪田塾はおかげさまで7年目を迎えることとなります。



認証講座の様子

お詫びと訂正

去る9月発行の拓水第659号11頁「淡路島でもサバイバル訓練」におきまして、神戸海上保安部の講師のお名前を「榎野 毅専門官」と表記していましたが、正しくは「榎原 毅専門官」でした。関係者の皆さまには大変ご迷惑をお掛けいたしました。ここに訂正の上、お詫び申し上げます。

表紙の言葉



「兵庫県漁業者決起大会」

全国で燃油免税の恒久化を求める集会が続いています。私たち兵庫県でも、漁業者やJFグループ兵庫のメンバーによる“シュプレヒコール”の大きな声が会場内に響き渡りました。漁業を行なうための“生命線”である燃油は、近年の価格高騰によって漁家経営を圧迫し、今回の免税措置の打ち切りともなれば、漁業者が“沖に行けない”という現実を、私たちは目の当たりにすることになります。国民の蛋白源供給や食料自給率向上、また、私たちの生活をはじめ地域経済を守るためにも、全国的にもっと大きな“声”の渦となり、やがて、その声が、国や国民に必ず届くと信じています。